二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

小説 あらおし悠
挿絵 武俊彰

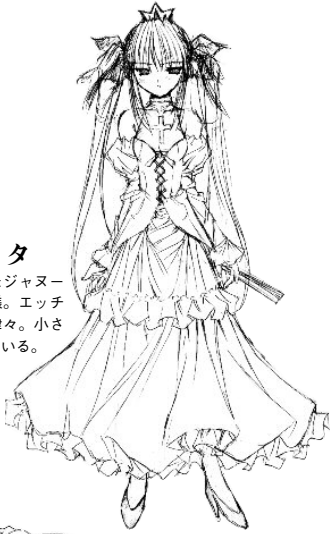
序章 006
第一章 清純姫のえっちなおねだり 010
第二章 わがまま姫の好奇心 054
第三章 初体験はお風呂の中で 116
第四章 お仕置きはヌルヌルプレイ 179
終章 246

登場人物紹介

Characters

レアル・ビオレッタ

少しツンとしたジャヌーラ王国のお姫様。エッチなことに興味津々。小さい胸を気にしている。



メラン

美少年大好きの魔女でセリトのお師匠様。妖艶で大人っぽいもののいつも気だるそうにしている。

アステル・ロドクルーン

ふんわりした印象のペディオン王国のお姫様。優しく、柔らかい物腰ながら少々頑固な所もある。

セリト・アルース

メランの弟子として毎日を忙しく過ごす少年。お姫様のお世話を仰せつかる。

『第一章　清純姫のえっちなおねだり』より

二本の指が、手探りだけで初めて触れる異性の性器の硬さと弾力を確かめる。それはセリト自身も初めて経験する、尋常でない硬さだった。まるで鍛えられた鋼のようにコチコチで、それなのに、そこだけが別の生物であるかのごとく、セリトの意思とは無関係にビクビクッと何度もしゃくり上げる。妙な責任感だか使命感に目覚めたアステルは怖気づくどころか、ほう……と熱い溜息をつき、強弱をつけてペニスをむにむにと揉み出した。

――にちゃ……。

さっきの射精で亀頭に付着していた精液が、せっかく拭ったアステルの手を濡らす。指が汚れるのが楽しいとでもいうように、穢れた粘液を絡めて遊ぶ。それを竿部に塗りつけては、殊更に粘着音を響かせた。

――くっちゅくっちゅ、ちゅぷ。

欲望まみれの性器と清楚な指が奏でる卑猥な音。ツンと鼻を突く、生乾きの精液のすえた臭い。石造りの狭い空間に充満し始めた淫らな空気に、セリトのみならずアステルも毒されて、拙い淫戯に没頭し出した。

「あ……また硬くなった……」

最初は恐々だった手つきが、徐々に大胆になってくる。新鮮な驚きで新しいオモチャを弄ぶ。セリトも、異性の指に性器を委ねるという初めての経験にどうしていいか分からずに、年上の姫のなすがままに任せてしまう。触れているのはたった二本の指なのに、ペニスから鋭い悦びが全身を貫く。

「あ、今度は跳ねた……。これって……気持ちいいのですか？」
アステルが耳に唇を寄せて囁いた。姫の吐息がくすぐったくて、コクコクと、壊れた人形のように、ただ頷く。気持ちよくないはずがない。部屋は暖かく、体温は上昇して汗ばむくらいなのに、初めての悦楽で身体がガタガタと震えた。
（姫様の柔らかい指が、僕のおちんちん触ってるぅ……。はぁぁぁ……誰かに触ってもらえるのが、こんなに気持ちいいなんてぇ……）
もしこれが、初めての接触なら、とっくに達していただろう。しかし一度姫の手による射精を経験した肉棒は、おままごとのような愛撫では満足しきれなくなっていた。もっと刺激が欲しい。もっと強く、思いきり握って扱いて欲しい。しかしこうして触ってもらっているだけでも夢のようなのに、これ以上の愛撫を要求してしまっていいものなのだろうか。快感の狭間で獣欲と姫への敬愛がせめぎ合い、焦れったさでクネクネと身悶えした。姫もそれを察したらしい。だがどうすればセリトを絶頂に導けるのか、それ以上は分からないようだ。
「あ……あの、姫様。僕……僕……」
「ごめんなさい、わたくしが自分で言い出したのに、至らなくて……」
「とんでもありません！　いつもなら一度出したら、こんな風にはならないし……」
「いつもって……ご自分で？」
この姫様、純情そうな顔をしていながら、さっきから露骨な発言が多い。純粋すぎて、

恥じらいとか羞恥心とかいうものが逆に欠けているのかもしれない。
「男の方も……ご自分で、その……なさるの、ですか？」
（男もって……まさか、姫様もオナニーを⁉）
純真可憐な姫君が、豪華なベッドの上で、夜な夜な秘められたひとり遊びに興じる姿を想像し、下腹部を直撃されてしまった。
「くぅ～ッ！」
苦しいほどに張り詰めた剛直がズボンの布地を擦り、甘い痺れが下半身を駆け巡る。
「あの……よろしければ、見せていただけませんか？　……あなたが、ご自分でなさっているところ……」
きゃっ、と小さな悲鳴を上げて、自分のおねだりの恥ずかしさに顔を伏せるアステル。しかし、濡れた眼だけは興味津々で、セリトの顔と性器を交互に見ていた。
清楚な姫が見せる意外な一面。だがその驚きも、躊躇（ためら）いも、わずかな理性も、淫らな遊戯に麻痺した心が呆気なく追いやってしまう。口の中に溜まった唾液を飲み込んで、無意識のうちに、無邪気なお願いに頷いていた。
セリトは下半身だけ裸になってベッドに座った。股間はまだ手で隠している。一度射精を見せてしまったとはいえ、性器を女性の目に晒すには、やはり幾ばくかの抵抗感があった。眼下ではセリトの脚の間にアステルが膝をつき、キラキラと輝く期待に満ちた眼が、早くその手をどけてくださいと言っている。

（いくらなんでも、こんなところ、お姫様に見せてしまっていいのかな……）
その葛藤すら、手の中でますます膨れ上がる欲望の肉塊が押し退ける。
「まぁ……」
アステルがその威容に改めて眼を丸くした。むわっとした牡の臭いと共に指の間から飛び出したセリトの肉の竿は、腹を打つほどに直立し、ヒクヒクと痙攣しながら真っ直ぐ天を突いていた。すっかり包皮が剥けて大人の顔をしていたが、肉茎は白く、ぷっくり膨らんだ亀頭も初々しいピンク。まだ女性を知らないと、その無垢な色が告白している。長さも太さも、人並みより多少大きい程度だが、男性器の平均サイズなど知る由もないお姫様には、十分すぎる迫力だろう。
「怖く……ないですか？」
「少し、驚きましたけど……でも、なんと言うか……綺麗な色で、可愛いですわ」
男として可愛いという評価は微妙な気分だが、ペニスは褒められて嬉しかったのか、充血した亀頭がぽっとピンクの色を増した。
「それじゃ……始めます」
アステルが黙って頷く。滑稽なほど神妙に視線を交わし、セリトは己の剛直に両手を添えた。毎日のようにしている行為のはずなのに、人に見られているというだけでこんなにも感じるものだなんて。慣れた自分の指が、こんなにも気持ちのいいものだなんて。こうして握っているだけで、今にも灼熱棒が破裂しそうだ。

――シュッシュッ。シュコシュコッ。

始めはゆっくり。しかし忍耐力のない淫棒が、すぐさま激しい摩擦を求めてきた。欲求に突き動かされ、残像が見えるほどのスピードで手首を返して竿を扱き、親指の腹で亀頭をくすぐる。その性器の先っぽに、射るような熱い眼を感じる。

（見てる……。おちんちんシコシコしてるとこ、可愛い眼でじっと見てるよぉ……！）

いつもならオナニーのオカズは、唯一身近にいる女性である師匠だった。もしもメランの誘惑に応えたら、どんなことをされてしまうのか、妄想しながら悶えていた。だが今はそれすら必要ない。純粋無垢な姫の視姦が、下半身をまるごと疼かせてくれる。快感に身体を支えていられなくなって、左手をベッドにつくと、自然と腰が前に迫り出て、勃起ペニスとアステルの眼との距離がグッと縮まった。

無言で自慰を観察する姫の眼も欲情で潤んでいる。興奮で乾いた唇を無意識に舐める仕種が、霞んだ視界の中であまりにも色っぽい。その吸いつきたくなるような艶めきに、最初の羞恥などとうに忘れ、まるで陰茎を苛めているかのように無我夢中で扱きたてた。

「凄い……激しい……。そ、そんなに激しくして……痛く、ないのですか？」

熱い吐息がペニスにかかる。それが快感に拍車をかけた。

「こ、これが……あはぁ……気持ちいい……気持ちいいんです……」

その言葉が嘘ではないと証明するように、肉茎の先端で透明な液が玉を作り、溢れ出してセリトの手をにちゃにちゃと濡らした。

「それはあの……精……液……では、ありませんの？」
「ち、違います……気持ちいいと、うく……出るんです。……あふぁ……じゅ、潤滑油、みたいなものです……」
「……男の人も……濡れるんですのね……」
何気ない呟きが、セリトの純情を再びズクンと直撃した。その言葉の意味するところを悟り、興奮のあまり、せっかく止まった鼻血を噴き出しかける。
（濡れる……？　女の人も……!?）
アステルが自分を慰めている淫らなショーが、閉じた瞼の裏で開催される。ベッドに横たわり、スカートをたくし上げて大胆に脚を広げるアステルの白い太腿。欲情に蕩けた顔でセリトを誘惑しながら、まだ見たことのない、脚の間に隠された女性の器官を晒す、お姫様の艶姿。ボンヤリとしたイメージしかない女性器が、透明な露で湿っている。妖艶な笑みを浮かべながら、清純な姫が濡れた性器に指を這わせる。
「ああ……そんな……そんないやらしい格好……」
妄想に没頭してゆく。自分を慰める手が速度を増す。オナニーでこんなに気持ちがいいのは初めてだった。腰が蕩けそうで、射精欲求がペニスを太らせる。
「はぁ……凄い、すごいですわぁ……」
その熱く湿った声が、現実の姫なのか妄想の姫のものなのか判別がつかないほど、セリトは公開オナニーに集中していた。だから、小刻みな往復運動をする自分の手に指がそっ

と添えられて、心臓が跳ね上がった。
　アステルがお尻を浮かせて膝立ちになる。額をセリトの胸に当て、剥き出しの股間を見下ろしながら、自慰の右手をそっと退かせた。ペニスを両手できゅっと包まれ、待ち焦がれていた温かい感触に、肉竿はドクドクと血液を集めて鋼鉄と化す。セリトのやり方を見て学習した姫君の手は、たちまち最高速度で歓喜に震える淫肉棒を扱きたてた。
「硬くて……熱くて……あぁ……また火傷してしまいそう……！」
　――グッチュグッチュ、ジュクッジュクッ！
　先端の鈴口からダラダラと際限なく溢れる、ぬるついた歓喜の先触れ液が、アステルの手を濡らし、妖しく照り輝く。肉棒を握る指の間から泡立ちながら流れ出て、生臭さを撒き散らす。股間でくちゅくちゅと粘った小さな水音を立て、初めての秘め事にのめり込む二人の性感を著しく刺激した。
「姫様が、僕の……僕のおちんちん触って、扱いてる！　……んっ……はぁ！　気持ち、いいですっ！　すごく、すごく気持ちいいッ！」
　アステルが、セリトの胸に頬をすり寄せる。快感に強張る腰を抱く。二人は、精液と先触れ液の混じった臭いを胸いっぱいに吸い込んだ。舌も臭いを感じ取ってピリピリする。きっと正常なら不快に思うに違いないが、濃厚な性臭は、甘美な媚薬のように二人の理性を麻痺させていた。
「はっ……あう、姫様……ひ、姫様ぁ！」

「ああっ……わたくしも、なんだか、身体が、熱くて……はぁぁぁ、熱い……ッ！」
アステルは熱に浮かされた顔で、セリトの太腿にバッタリと倒れ込んだ。息がかかるほどの距離で、屹立する肉杭を熱視線で見詰めながら、無我夢中で指を絡める。
「これが男の人のおちんちん……。すごい……すごいですわ……はぁぁぁ……」
――シュコシュコシュコシュコッ！　グジュッグジュッ！
激しく扱かれた先端から白く濁った飛沫が舞い、扱く手やセリトの太腿に淫液の斑点を描いた。アステルの唇にも先触れ液が飛び散る。彼女はそれをおいしそうに舐め取った。
「はぁ、はぁ……もっと、もっとよくなって……はぁぁぁぁン！」
掌が性感帯になってしまったように、紅潮した顔で喘ぐ。官能に支配された清純姫は、女の身体にはない珍しいパーツに興味を持ったのか、たっぷりと精液を溜め込んだ陰嚢にまで手を伸ばしてきた。
「ひっふぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
そこは男性にとって最も過敏な部分。力加減によっては悶絶するほどの激痛を味わうところだが、初心者であるが故の臆病な手つきが幸いした。睾丸をコロコロと転がされ、痛みを伴う絶妙な快感に、絶頂への引き金を引かれる。
「す、凄いです姫様ぁっ！　き、気持ちいいいいいいいッ!!」
「アステルと、アステルとお呼びください、セリト様っ！」
「ああっ……ああッ！　アステルさまっ！　アステルさまッ！　で、出るッ……もうイ

ッちゃいますぅ！」
　セリトは女の子のような悲鳴を上げて絶頂快感の予感に身悶える。睾丸がせり上がる。射精管を駆け上る欲望の塊が、アステルの掌に絶頂の予感を伝える。
「そんな激しくされたら……あっ……あっ！　おちんちんがっ！　あはぁ、玉も、玉ももっと揉んで、転がしてくださっ……き、気持ちいいいいいいいッ！」
「出そうなのですね？　また白い精を、出したいのですねッ⁉　あぁ……見せてください！　セ、セリト様が気持ちよくなって、いっぱいドピュドピュしてしまうところ、わたくしにっ見せてくださいッ！」
　アステルも汗ばんだ顔ではしたなく息を荒げ、ドレスのお尻をモジモジとくねらせる。セリトと共に絶頂を迎えようとしているかのように。
「出してっ！　思いきりっ！　セリトさまッ！」
「ダメです姫様！　もう出る出る、で、ああ、あ、アステルさまぁぁぁぁぁぁぁぁ⁉」
　セリトの尻肉がキュッと締まった。情熱的で激しい摩擦に肉茎が限界まで膨れ上がる。グツグツと煮えたぎった溶岩が、火山のように噴き上がる。
　――ドピュドピュ、ドピュルルルルルッ！
「きゃぁっ⁉」
　二度目とは思えない大量の粘液砲弾がアステルの美貌を直撃した。輝くティアラを、艶やかな金髪を、幾度も叩き、汚し、犯す。

『第二章　わがまま姫の好奇心』より

「えぇ⁉　同じ穴からおしっこと精液が出るの？　へぇ、男の子の身体って面白い……」
感心したように、まじまじと鈴口を覗き込む。
「女の子は、違うんですか？」
「当たり前じゃない、女は……何言わせようとするのよ、このエッチ！」
バチンとセリトの太腿をはたいて、そっぽを向いてしまった。せっかくいい感じになってきたのに、機嫌を損ねてしまっただろうか。
「な……なんなら……見てみる？」
「――え？」
「だ……だから、お、女の子の、あ……あそこ、見てみるかって聞いてるのよ！　恥ずかしいんだから何度も言わせないで！」
耳もうなじも真っ赤に染めて、破廉恥なことを口走る顔を見られまいと、セリトの腹にしがみつく。
（女の子の、あそこ……）
見たいと思ったことは幾度となくあるが、見られるなんて一度も思ったことのない、男の子にとって、乳房以上に神秘の聖地を？
「み、みみみ、見たいです！」
今度は迷わず即答した。さっきのようにぐずって「やっぱりなし」なんてなったら、絶対、一生後悔する。眼をギラギラと輝かせ始めたセリトに、レアルの顔がわずかに怯んだ

が、期待に膨らんだ胸と股間は止められない。

「あんたって……本当にえっちね。この変態。……ちょっと……待ってなさい……」

罵り言葉を吐きつつも、その言葉は淫蕩な笑みを浮かべている。呼吸で胸を荒く上下させながらお尻を後ろに突き出し、スカートの中に手を入れた。ヒラヒラしたスカートに隠れて見えないが、中でモゾモゾと腰をくねらせ、膝まで何かを降ろしている。足首から抜いたそれを隠すように、手の中で丸めた。よく見えはしなかったが、それは紛れもなく、白い下着。恥ずかしそうに顔を染めながら、床にペタリと腰を降ろす、銀髪の姫。

「み、見せるだけだからね……」

セリトは夢遊病者のようにフラフラ歩み寄り、お姫様の膝に手を置いた。ドレスの裾をそろそろと摘み上げると、それに合わせるように、レアルが上体を倒して仰向けに寝そべってゆく。長い紫色のスカートが滑り落ち、白い太腿が露わになった。少女らしい丸みを帯びた、脂肪の薄い、頼りなげな細い太腿。

「あ……」

くすぐったいのか、恥じらいか。レアルは天を仰いで目を閉じ、小さく溜息を吐いた。震えているのはセリトの手か、それとも彼女の脚だろうか。微動を感じながら、わずかに開かれた少女の脚の間に顔を割り入れる。スカートの奥に、脚の付け根が見えてきた。徐々に灯りが差し込むその中心には、キラキラ輝く陰毛の淡い翳り。

「毛が生えてる……」

「――！　やっぱりダメ！」
セリトの呟きで羞恥が戻り、慌てて脚を閉じるが少しばかり遅かった。セリトの顔は太腿の最深部まで突っ込まれ、少女の恥ずかしい中心は、すでに少年の視界の中。
「すごい……」
「やだやだ、やっぱり見ちゃダメぇぇっ！」
バタバタと暴れる膝を抱え込んで、欲望に突き動かされるまま秘められた花園へと顔を寄せる。そこは性の源。欲情の泉。初めて目にする神秘的な光景に、その美しい佇まいに感動すら覚え、一瞬にして眼と心を奪われていた。銀糸の陰毛の下に、ぷっくりと膨れた二枚貝。それがわずかに口を綻ばせて、サーモンピンクの貝肉を覗かせている。
（これが……女の子の……！）
秘貝からは愛液が湧き出ており、その下で色づく小さなアヌスの窄まりまで垂れて、少女の股間を艶々と光らせていた。
（アステル様の言ってた通り、女の子も興奮すると濡れるって、本当だったんだ……）
しっかりと記憶に焼きつけたいのに、興奮で頭がクラクラして、視界が定まらない。
（もっと……もっと近くで……）
掴んでいたレアルの太腿をグッと広げ、肩を割り込ませる。
「いやぁ……そんなに顔近づけないでぇ……」
抵抗する姫の声も弱々しい。あまりにも恥ずかしすぎて、セリトを跳ね飛ばす力すら出

ないのか。痙攣する少女の股間。湧き出た新たな愛液が、トローっと流れて会陰部を濡らした。蜜にまみれた花園に鼻を近づけると、柑橘系の、ツンとした香ばしい匂いが立ち上る。その香りを胸いっぱいに吸い込んだセリトは、ミツバチが花の匂いに誘われるように、自然と少女の花弁へ舌を伸ばしていた。

「……ちゅる、ぺろ……ん……」

「やだ、なにして……はぁぁぁぁぁッ!?」

太腿にまで張りついた蜜をペロペロと舐め取り、飲み込んで喉を潤す。じっくりと味わうような余裕はなかったが、少しきつい匂いと、サラサラとした喉ごしがたまらない。強張った内腿に、ポツポツ汗が浮かび上がる。セリトはそれも一緒に啜った。

「見せるだけって言ったのにぃ！　そんな……な、舐めないで……恥ずかしいよぉっ！」

そんなことを言われても、もう止められない。滾々と湧き出る泉を飲み干すことで頭は一杯。これは愛撫だとか、優しくするとか、そんなことを考える余裕すらなかった。秘唇との口づけに夢中になり、少女の恥蜜を味わい尽くす。

「ひぁん！　舌……舌ぁ……中、入ってくるぅ!!」

いつもツンと澄ました小生意気な姫が、可愛い声で啼いている。セリトの舌を感じて喘ぎながら腰を震わせている。まるで失禁したように、レアルの股間はビショビショだった。

「レアル様のここ……とっても……ちゅる……おいしいれす。んぷふぁ……ああ、まだ溢れてきます。もっと飲んでいいれすか？　ちゅる……じゅるるるっ!!」

「あふぁぁぁぁん！　へ、変な音立てるな馬鹿ものぉ！」
自らの股間が奏でる恥ずかしい音に、レアルは死にそうなほど顔を真っ赤にしていやいやと首を振った。もうセリトを離そうとはしない。髪を撫でながら、綻び出した性器へグイグイと押しつけてくる。
「あたしぃ……なにしてるのぉ？　こんな平民相手にあたし……あたしぃ……」
切なげに悶えるレアルの声に、セリトの胸がキュンと締めつけられた。ただ女の子の秘密の部分を見たいという単純な欲望が、姫への愛おしさへと急激な変貌を遂げる。
「レアル様……僕の舌で……んちゅる、気持ちよくして、さしあげます……！」
「もう遅いぃ！　もうあたし……気持ちよくなっちゃってるぅぅっ！」
甘い悲鳴が、セリトの理性をどこかに飛ばしてしまった。この少女をもっと感じさせたい、悶えさせたいと、淫らな欲求がムクムクと頭をもたげる。
口を閉ざしていた乙女の可憐な筋は、淫裂と呼ぶにふさわしい、卑猥な姿へと成長していた。セリトの唾液と愛液で濡れた、幾重にもなる肉の襞がパックリと口を開け、物欲しそうにヒクヒクと蠢いている。もっと深く舐めようと、ぬるついた粘液を指に纏わりつかせながら肉のカーテンを掻き分ける。
（あれ……穴が二つある？）
どちらを愛撫すればいいのか分からず、とりあえず前に位置する小さな窪みを舌先でつついてみた。

「ひゃン！　バカ違う、そこ、おしっこの穴ぁ‼　その下の、もうひとつの方ぉ……」
（もしかして、こっちが、膣？　女の子って、おしっこの穴、別なんだぁ……）
女の子の身体の構造を初めて目の当たりにしたセリトは、驚きで、しばし、マジマジと観察していた。
「やぁ……なにしてるのぉ！　はやく、もっと舐めなさいぃ！」
言葉は命令調なのに、その声は蕩けそうに甘い。彼女もまた、性器に受ける初めての口唇愛撫の虜になっていたのだ。再び淫裂へ口を寄せる。ただ口を押しつけて蜜を啜るだけから、少女の秘所を愛でる愛撫へと変化していた。大陰唇を両手の指で開いて、内側の襞を舌でくすぐるように、女陰の割れ目に沿って舌を上下させる。レアルも無意識に腰で円を描いて、セリトの舌を誘い込む。
「ふわ……ひっあぁぁぁ……それぇ、それ気持ちいい……あ、ンン！　舌ぁ！　舌、入って……あたしの膣に入って……ひぐぅぅぅッ⁉」
「ぺろ……ここが……気持ちいいんですか？」
「そうよ……そこぉ。ん……そこ……がぁぁ……お、男の子の……ものを、おちんちんを、挿れるところが、気持ちいいのぉ……」
興奮してあられもないことを口走るレアルに、セリトの股間は一層腫れ上がった。
「そんなに激しくしたら、あたし……あたし、おかしくなる、あたし、あ……ああん‼」
暴れる腰にセリトの舌は狙いを外し、充血してぷっくりと腫れ上がった淫核を掠めた。

「ひッきゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!?　そこダメェ!!　か、感じすぎるぅぅッ!!」
ガクンと腰がバウンドする。そこが女性の一番感じるところだと本能で察知したセリトは、快感の肉芽を集中して責め立てた。甘噛みしながら、舌先をチロチロとそよがせる。
「それホントにダメ、あたし、あたし、ひッひぃぃぃぃ!?」
悲鳴に近いよがり声を上げて、白い喉を仰け反らせた。全身に力が入り、腰が暴れる。逃がさないように太腿に腕を絡めて、硬い淫核とのキスを貪った。ダラダラ流れる愛液を舌で掬い、肉芽に塗りつけては啜り上げる。
「れろれろ、にゅる、チュルゥゥゥゥッ！」
「ひふぁぁぁ!?　変……ヘンだよぉ！　何か来る、おっきなのが、あぁぁぁ……身体の奥から、おっきいの来るぅぅぅッ!?」
カリッ――！　充血しておいしそうなピンクに染まった少女の淫核に歯を立てた。
「何これ何これ、なにこれぇぇぇぇぇッ!?　変になる！　変に、ヘンに……へひィィィィィィィィッ!!」
――ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!
愛液がシャワーのようにセリトの顔に降り注ぐ。ビクビクッと背筋をしならせて、レアルは快感の絶頂に達してしまった。
「ひぁぁぁぁぁぁ……ふぁ……ふぁぁぁぁん……！」
セリトが、愛液でベタベタの顔を上げると、レアルは床にドサッと身体を落とし、唇の

『第四章　お仕置きはヌルヌルプレイ』より

「やぁ……は、恥ずかしいです……そ、そんなに、おっぱい、揉まないでぇ……」
「セリトくんのおっぱい、可愛い……。ああ……私におちんちんが付いてたら、セリトくんを思う存分、犯してあげるのに」
ゾクッ――と全身に鳥肌が立つ。師匠の願望に対する嫌悪ではなく、倒錯的なプレイに覚えた異常な興奮に。巨大なペニスを持った美女に組み伏せられ、嬲られ、犯され、身体の内を掻き回されて、よがり狂う自分の姿に。姫様たちの快感に乱れた姿を見ていたセリトは、処女喪失の痛みも知らず、それがとても気持ちのいいことに思えてきた。
「ぼ……僕も……お師匠様に犯されたいです……」
「いいわ……後でたくさん犯してあげる……」
首筋に口づけられた。吸血鬼に血を捧げるように首を差し出し、甘噛みされ、失禁しそうな快感に腰が蕩けそうになる。自分の中にこんな被虐願望があるなんて、姫様たちを抱いていた時には思いもしなかった。妖艶で、怖いくらいに美しい師匠だからこそ、苛められてみたいという欲求が生まれるのかもしれない。メランにとっては言葉遊びに過ぎなくても、セリトは女の子の快感を想像するだけで腰の奥が甘く疼いた。
しかし下半身では自分の存在を忘れるなと、肉勃起がいきり立つ。その形と大きさを誇示するようにズボンを押し上げ、ビクビクと大きく跳ねる。背中からズボンを引き抜かれた。ブーツも脱がされ、何も覆うものがなくなった小柄な身体の中心で、硬直勃起が、自らが漏らした体液でぬらぬらと妖しく光る。

「顔に似合わず、立派なものを持っているのね」
「あ……ハッ！」
興奮のあまり無意識のうちに脱衣を許し、全裸にされてしまっていた。閉じようとしたセリトの太腿を背後から長い脚が搦め捕り、大開脚を強要される。
「なんて大きさ……こんな凄いの見たことないわ。どれだけエッチなこと考えたら、こんなに大きく育つのかしら。女の子の身体に挿入したら、壊れちゃいそう」
「ああ……み、見ないでください……！」
姫様たちとの淫戯で多少は慣れたとはいえ、欲望剥き出しの性器を視姦されるのは、たまらなく恥ずかしい。耳元で冷笑されて、羞恥心がまた快感を煽る。やんわりと、熱勃起を包み込む師匠の手。軽く扱かれるだけなのに、どんどん硬度と快感と鼓動が高まる。まるで掌が女性の膣のようで、腰を前後に振ってしまう。勝手に射精感が込み上げてくる。
「……私の膣に、挿れたい？」
ペニスを握られたまま囁かれ、ドキドキが止まらない。
「お……お師匠様の膣に……」
ドクンと、ペニスの血管が脈打った。それが返事。横抱きにしていた身体を仰向けに寝かせて覆い被さり、優しく扱きながらキスをして、おいしい唾液を飲ませてくれた。
「すっごい……また大きくなった」
メランも、腰を覆うだけだったドレスを脱ぎ捨てる。もはや身につけているのは、黒い

帽子と、流麗な脚線を包む黒いストッキングのみ。太腿の中ほどに精緻な刺繍が施され、彼女の美しさを際立たせている。

「ふふ、おいしそう……」

ペニスを見下ろすメランが呟く。それはセリトも思ったことだった。腰を跨いで膝立ちになった師匠の裸身。美巨乳を濡らす母乳の白い川。細く括れたウエストや張りのあるヒップ。黒く濃く、縮れた恥毛に覆われた淫裂から、欲情の滴が糸を引いて垂れ落ちる。

遠くから、アステルとレアルの喘ぎが耳をくすぐった。二人への想いを裏切る行為に胸を痛めるが、初めて目の当たりにした師匠の肢体はあまりにも魅力的。何度この身体の誘惑に悩まされてきたことか。何度この肉体を妄想し、自分を慰めてきたことか。

師匠の熱い淫滴が、期待に震えるペニスに落ちた。最後の理性が融解する。一刻も早く彼女とひとつになりたい。今はそれしか考えられない。

「それじゃ、セリトくんのおちんちん、食べちゃうね」

熱勃起に指を絡め、セリトを、そして彼女自身を焦らしながら、ゆっくりと、じわじわと、師匠の腰が降りてくる。淫裂の火照りを感じて、待ちきれないペニスが首を伸ばす。

「いただきまーす」

ぱくっと膣口が先端を捕らえた。柔らかい濡れ粘膜が亀頭を包み、それだけで射精しそうな甘い衝撃が肉棒から脳天まで駆け抜ける。しかしメランは深い息を吐きながら、ぴたっとそこで動きを止めてしまった。

「そ、そんな……お、お師匠様ぁ……は、早く……くぅッ……」
挿入したくて腰を突き上げるが、メランは亀頭の先を咥えたまま器用に逃げる。挿入できそうでできない快感の生殺しに、半泣きになってしまう。中途半端な挿入感だけを与えられ、気がおかしくなりそうだ。
「ふふ、可愛い顔で泣いちゃって。そんなに私の中に入りたい？」
「は……はいぃ！　お師匠様と繋がりたいですっ。こ、このままじゃ、僕っ……」
「でも、セリトくん、秘密ばっかり。正直に話してくれないし、やめちゃおうかなぁ」
「そ、そんなぁ！」
今更ここまできてそれはない。下半身の欲求に支配されたセリトは、ささやかながら持っていたプライドをかなぐり捨てた。
「話します。なんでもお話しします！　狭い部屋に閉じ込めていてはアステル様が可哀想だから、外に出してあげました！　レアル様が怖かったから、身代金を使い込んで家具を買い揃えてあげましたぁ！」
「あれは私のお金よ。それに、もとは税金じゃないかしら？　それをお姫様の贅沢のために使ってしまって……悪い子ね」
「あぁ……僕は悪い子です！　ごめんなさい、ごめんなさい！　それから僕……」
謝罪を聞けて満足したのか、最後の告白をする前に、メランはクスリと微笑んで。
「よくできました」

ペニスが生温かいぬかるみに沈んだ。
「はぁっ！　あぁぁぁぁぁ！」
成熟した女性の肉体は、小柄な少年の長大な陰茎を、根元まで苦もなく飲み込んでしまう。処女だった姫様たちとは一味違う柔肉。優しく激しい肉襞の愛撫。恥肉の熱さに、ぬめりに、焦らしに焦らされたペニスが溶かされてしまいそうだ。
「はぁぁぁ……ふふ……ふふふ……。セリトくんの童貞、奪っちゃったぁ。はぁ……すっごい……太ぉい……。これであなたは……私のものよ……ン、ふふっ」
幸せそうに微笑む師匠を見て、最後に言いかけた姫様たちとの性交を白状しなくてよかったと、心の隅で安堵した。しかし、わずかに残された思考力が働いたのもそこまで。
「ああっ⁉　お師匠様、まだ動かないで……！　今動かれたら僕、僕っ、あっ、はっ、あああッ！　すぐにイッちゃいそうですぅぅっ！」
「構わないわっ、何度だってっ……私の膣に出させてあげるっ！」
まるで少女の手に握られているかのように、柔らかく、温かく、湿った膣襞がうねうねと蠢く。上下運動で扱かれるたび、膣壁の無数の粒々が肉竿にキスをして、たまらない快感を与えてくれる。
「あん、セリトくんは動かなくてもいいのよ。私が、みんな、してあげる……。ほら、こうして……うんと気持ちよくしてあげる……っ」
「そ、そんなこと言われてもぉ、腰、動いて……ああッ！　じっとしていられない！　は

ひっ……はぅわぁぁぁぁッ！」

初めて味わう大人の女性の肉体。嵐のような快感に翻弄されて、身体が勝手に動いてしまう。情けない声で泣き言を喚きながら、悦楽の大波に逆らうように歯を食い縛り、ベッドに爪を立てて掻き毟る。

――ずにゅっ！

暴れる肉棒の開ききったカリ首が、膣壁前部の膨らみを引っ掛けるように擦った。

「はぁう⁉」

余裕でペニスをいたぶっていたメランが、身を捩らせて倒れ込む。豊満な乳房のクッションに、セリトの薄い胸が圧迫された。

「私、そこ責められると弱いのにぃ……！」

「あ……ご、ごめんなさい！」

「バカね。怒ってるんじゃないの。……そこ……いいの……。もっと、突いて……！」

甘えるように腰をくねらせ、自分で弱点と言った部分を、擦りつけてくる。うっすらと涙さえ浮かべながら、ぽってりとした紅い唇を押しつけ、口づけしてきた。鼻孔や口腔に流れ込んでくる、発情した女の濃密な匂い。甘い蜜のような香りに酔って、夢中で師匠の唾液を啜った。しかし、せっかく師匠がいいと言ってくれたのに、下半身はじっとしたまま身動きが取れない。

（ああ、ダメだ！　少しでも動いたら、すぐに終わっちゃう……！）

柔らかい膣肉に握られたペニスは爆発寸前。少しでも長く、この切迫した感触を楽しみたくて、キスで気を紛らわせようとしていた。
「ほら、お姫様たちを見て。気持ちよさそう」
師匠が鳥籠を指差す。ドレスの残骸を身体に引っ掛けているだけの二人の姫が、脚を交差させ、互いの秘所を擦り合わせていた。圧し掛かるスライムが少女たちの身体を覆い、そのぬるつきを愉しみ、利用しながら腰を振る。胸に相手の脚を抱き、爪先を舐めては、快感の喘ぎを叫んだ。
「おま〇こ、ぐちゅぐちゅしてるぅ！　あ……アステルの、おま〇こ気持ちいいッ！」
「あん、わたくしも……またイッちゃいそうですぅ！　おマメ擦れて、ひ、いいぃイッちゃいますぅぅぅ!!」
せめぎ合う股間でピチャピチャ、クチャクチャと粘着質の音を立てているのは、黄金色の粘液か、それとも二人の恥ずかしい体液だろうか。お姫様らしからぬ卑猥な言葉を連呼しながら、幾度目かの絶頂へ昇り詰める。しかし、痙攣する身体はなおも秘部を摩擦し続け、絶頂快感が鎮まるのを待たずにさらなる絶頂へと二人を導いた。
「ひぅあぁッ!?　イッたばっかりなのにぃ、またイッちゃう！　いやぁぁぁぁっ、やめてぇぇっ！　また気持ちよくなる、腰、動いちゃうぅぅッ!!」
「レアル様、動かないで！　わたくし、つらい！　気持ちよすぎて……あああッ！　おかしくなってしまいます！　何も考えられない！　き、気持ちいいいいいいッ!!」

姫様たちの嬌声につられて、堪えきれなくなったセリトの下半身が動き出す。師匠の濡れた粘膜にその身をすり寄せ、悦楽の極致に向かって走り出す。

「私たちも負けてられないわね。ふふっ」

セリトの胸に手をついて、メランも腰を捏ね回した。纏わりつく濃厚な愛液が、姫様たちの服をドロドロにしたスライムを連想させる。自分のペニスもあんな風にされてしまいそうで、恐怖よりも、師匠の身体に溶かされる悦びに身体が震えた。

「くる……あああ熱いものがぁぁぁ昇ってきますッ！」

亀頭を撫で回す無数の襞。ピンと張り詰めた肉棒の裏を舐め上げられ、射精の予感に腰が疼いた。下からぶつけるように腰を跳ね上げ、メランのお尻が、パンパンと小気味よいリズムを刻む。眉間に皺を寄せるセリトの必死の表情が、師匠の加虐性をくすぐった。

「出ちゃうのね？　ふふっ、精液いっぱい出したいのね⁉　私はあなたの先生よ。生徒が先生を犯して、膣に出しちゃっていいのかしらっ？」

「ああダメです……先生の……お師匠様の膣に出してしまうなんてそんな……！」

絶頂間近のセリトを苛めたくなったのか、メランが意地悪を言い出した。煽られた背徳感に、背筋は電気が走ったようにピリピリ痺れ、焦燥感に胸が震える。禁忌を犯しているのだと思うほど、禁断の悦びが大きくなる。もっともっと師匠を犯したくなる。

「ごめんなさい、お師匠様ぁ！　……お、おちんちん気持ちよくて……もう、腰、止まりませんンン！」

「ああ……困るわ。私、弟子に膣に出されてしまうなんて……あ……どうしよう、私、よくなってしまう、弟子に犯されて気持ちよくなっちゃうぅ！」
芝居じみたわざとらしいセリフにも後押しされて、メランの腰を掴んで揺さぶった。実際はメランにコントロールされた動きだったが、それを感じさせない巧みさで、セリトは思う存分、師匠の媚肉を味わった。
「うあああああッ！　お師匠様！　出していいですか！　お師匠様の中に、中に……はぁぁぁぁ！　だ、出します！　出るぅぅぅぅっ！」
駄目と言われても止められない。師匠の膣を目がけて精液の大群が上昇してくる。
「いいわ、いらっしゃい！　セリトくんの精液、私の身体でみんな飲んであげる！」
「はぁぁぁぁっ！　うわぁぁぁぁ！　お師匠様ぁぁぁぁぁぁぁッ!!」
――ドクドクッ！　ビュルッ！　ビュルルルルゥゥゥゥゥッ!!
ペニスが脈打った。激しい射精が、師匠の膣を白く濁った精で満たす。
「……あ……あああ……まだ出てる！　ふふっ……はぁ……セリトくんのあったかい精液で……私のお腹、いっぱぁい……」
うっとりとお腹を押さえ、胎内の脈動を堪能するメラン。腰を上げると、粘る白濁液を纏わりつかせながら、ペニスがずるっと抜け落ちた。メランの淫裂からも、乳白色の精液が垂れて太腿を汚す。あまりに激しい絶頂に、セリトは気を失いそうだった。柔らかくなりかけの肉塊が、名残惜しそうに師匠の股間との間を細く白い粘糸で繋ぐ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!